

如の使用権としての価値を持つかどうか、これは見ただえのある未来風景だ。

私とヴァイオリン

中嶋 嶺雄  
（東京外国語大学助教）

「私とヴァイオリン」というテーマで書こうとすると、どうも気恥かしさの方が先に立つ。肝腎のヴァイオリンの方は、こんなことではいけない、いつも思いながら多忙にまぎれて弾く機会がますます少なくなってしまうというし、私のヴァイオリン技術は、せいぜいメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲程度であって、少しも進歩していない。このころでは、密斎で原稿を書くときに、ときにはパツィやモーツァルトを、ときには大好きなプロコフィエフをテープで流して聴くのが日課のようになってしまうている。

そんな私のヴァイオリンについて、いつか草柳大蔵氏が鈴木鎮一先生の才能教育を『週刊文春』で紹介された際に言及されたためであろうが、市民大学などで地方講

幻の蠅の軍団

草野 心平

おれは山小屋で独り眼さめ。小用のためドアをあけた。満月。その満月が突如曇ったのは雲がかすめたためではなかった。億萬萬の蠅共が襲ってきたのだ。耳にはいる。鼻にはいる。目にもはいる。舌にする。苦しくなって口をあけたら黒ダンゴのかたまりが喉チンゴまでもぐってくる。胸にもはいる。もぐりこむ。ぶんぶん唸りながらおれをとりまく億萬萬の蠅の輓幕。

演に行くど同業者が言及されることがあるので、ますます気恥かしくなってしまう。わが愛する郷土、信州松本に生まれた私が初めてヴァイオリンを

手にしたのは、たしか終戦の翌年、私の小学校四年生のときであった。敗戦の傷跡は、松本のような山岳都市にも及んでいたが、そのような荒廃にもめげず、そこに

はすでに素晴らしい音楽的創造の芽生えがあった。鈴木鎮一先生が音楽の森民樹先生らと創めた松本音楽院がそれであり、従兄が趣味でヴァイオリンを弾いていたのを羨

ましく思っていた小学生の私は、両親にせがんで、雪の晴れあがった或る日、母に連れられ、鈴木先生の門下に交わったのである。鈴木先生の才能教育が、わが國ではしばしば「天才教育」と誤解されることはあっても、いかにオリジナルな人間の可能性開発のための教育であるかについては、私がここで言及するまでもなく、先日もくなくなったカザルスをはじめ世界の音楽家がそれに驚嘆しており、子供たちの大合奏を聴いたものなら誰も胸を打たれるであろう。いまでは欧米各国からの留学生がヴァイオリンをかかえて歩いてくる姿が、松本の街角で見かけられる一般的光景にもなっている。鈴木鎮一先生が間もなく御病氣になられてからしばらくのあいだ、私は先生の愛弟子の一人、まだ二十歳前後の奇麗な山本恵子先生に教えていただいた。すでに昭和十五年の毎日音楽コンクールで優勝した山本先生は、戦後の混乱

のゆえであつたらう、浅間温泉を  
 襲った集団チフスで天折された  
 が、健在であれば巖本真理さんや  
 辻久子さんと並んで活躍されてい  
 るはずである。  
 鈴木先生の最大のお弟子である  
 豊田耕児氏がわが国を代表する  
 ばかりか世界を代表する演奏家だ  
 あることは周知のとおりである  
 が、私より数歳年長の彼がレッス  
 ンを受けているときの真摯な姿に  
 は、その音楽の豊かさとともに、  
 莊嚴な雰囲気さえ漂っていた。彼  
 が後年、グリニモオを師に選んだ  
 と聞いて、私はやはり豊田氏なら  
 ばこそ、と思ったものである。そ  
 んな彼を、私たちは「耕ちゃん耕  
 ちゃん」と呼んで親しんでいたが、  
 戦災で両親を失い、鈴木先生の一  
 家族として育てられた「耕ちゃん  
 」は、よく私の家にも来て話し  
 たり、遊んだりもした。ときには  
 代稽古もしてもらい、パッハの律  
 動の厳しさを大柳町の鈴木先生宅  
 の土蔵の二階で手をとって教えて

くれたのも「耕ちゃん」である。  
 「耕ちゃん」には、新橋の梅沢楽  
 器店から私にドイツ製の弓を選ん  
 で買ってきていただいたこともあ  
 るが、今も私はその弓を大切に使  
 っている。その頃、松本へは、小  
 林健次氏もときどきレッスンに來  
 ていた。いつか冬の寒い日、ヒマ  
 ラヤ杉で蔽われた信大(旧制松高)  
 の講堂で鈴木先生が燕尾服姿の正  
 装でオーケストラを指導し、豊田  
 耕児氏が独奏したときのモーツァ  
 ルトの協奏曲第五番も私の耳元に  
 その音が残っている。  
 いずれも、もう二十年以上も前  
 のことであり、私はこの間、豊田  
 氏とついに会う機会を失している  
 が、当時、私より年少の生徒たち  
 のなかには、最近、帰朝してます  
 ます好評の志田とみ子さんやベル  
 リン・ラジオ・オーケストラの山  
 田絃子さんがいた。私は、そのよ  
 うな俊英のながで不出来な生徒で  
 あり、家業の不幸もあって、高校  
 生の頃からしばらくレッスンをや

めてしまったが、そんな私でも、  
 大学生の頃は、素人ばかりの大学  
 のオーケストラのコンサートマス  
 ターにエキストラで招かれたり、  
 大学祭では中野公会堂でモーツァ  
 ルトのロンドやウィニャウスキー  
 の譚詩などを独奏した。  
 たまたま学生自治会の委員長だ  
 ったので、聴衆のあいだから、当  
 時の学生運動にからめて「勤評反  
 対」と野次が飛んだのは閉口  
 してしまった。大学院時代は、学  
 資のためもあって、私自身「霞ヶ  
 丘ヴァイオリン教室」を主宰し、  
 子供たちを教えたが、ようやく中  
 園研究の方が本格的なものになっ  
 たので、お茶の水の日仏会館で子  
 供たちの発表会をやつて教室を閉  
 じた。  
 最近の想い出の一つは、あの文  
 化大革命の激動期に中園を訪れた  
 ときのことである。上海の工業展  
 覧会で中園製ヴァイオリンが展示  
 してあったので、許可を求めて弾  
 いてみたら、なかなかいい音がす

る。女子の服務員にピアノが弾け  
 る人がいたので、彼女の伴奏で  
 「東方紅」を即興で弾いたら、黒  
 山の紅衛兵からやんやの拍手を浴  
 びたことがある。六九年から七一  
 年まで外務省特別研究員として香  
 港に留学していたときには、シテ  
 イ・ホテルで小室内楽を演奏し  
 た。音楽に飢えている香港なので  
 ありう、翌日の「ホンコン・スタ  
 ー」紙に写真入りで記事が出たの  
 で、またまた気恥かしくなつてし  
 まった。どうも、「私とヴァイオ  
 リン」は、気恥かしさの連続であ  
 る。  
 清水幾太郎氏が最近の「朝日新  
 聞」にテレビの「題名のない音楽  
 会」を愛好されていることを書いて  
 おられた。音楽にはまったくの  
 素人だと自称される清水先生  
 は、去年の末の忘年会に是非私の  
 ヴァイオリンをと求められたのだ  
 が、やはり気恥かしさのあまりお  
 ことわりしてしまつた。だが、  
 「私とヴァイオリン」なんて書い

てしまった以上、いつかは弾かね  
 ばならないと覚悟している。

信濃大町

治三十五年に篠ノ井線が開通する  
 と、登山者たちは有料から馬車に  
 乗りつき、大町にやってくる。針  
 ノ木、黒部の險路を辿るようにな  
 った。大正五年には松本、大町間

屋、同十四年には針ノ木小屋を建  
 設した。信州側の黒部ルートに近  
 代の脚光を持ちこんだ功績は大き  
 い。一方牧水門下の歌人で、たく  
 さんの秀歌を残している。里にい

木暮理太郎、中村清太郎、辻村伊  
 助、冠松次郎、また横有恒、浦松  
 佐美太郎、大島亮吉等々、日本の  
 山の名士は、こぞって黒部を目ざ  
 した。そして、大正十四年一月、